

やってみ！チャレンジ

氏名	朝倉美保
計画名	円町ワクワク体験学習
計画申請日	2021年6月8日
計画終了日	2021年11月28日

1 計画内容と目的

<目的>

Reframe は不登校や発達障害、HSC など困りを持った子どもたち及び貧困家庭、家庭に居場所がない子どもたちに居場所提供及び学習支援を行う非営利団体である。不登校児童は8年連続して増加傾向にあり、コロナ禍では自主休校する生徒も増えている。1クラスに1名以上は不登校児童がいるとされており、まだ支援に繋がっていない子どもも多いと感じている。体験活動を通して支援団体の存在をしり、支援と繋がってもらうことで家庭の精神的不安を取り除いていくことを第一目的とする。

また、体験活動は四季を感じられるような体験、自然の大切さを感じられる体験、人と人との助け合いでの喜び体験を通し、達成感や成功体験することで自尊心の向上を行うことを第二の目的とする。

通常、居場所内での学習及び遊びを通じた学びを提供しているが、利用している子どもたちに集団行動を通じた体験活動も提供したいと考えている。しかし、現在無償ボランティアとして活動しているため、何か体験活動を行いたいと思っても家庭の費用負担が大きく、経済的理由のために参加できない子どももいる。それを解消する手段として、貴支援制度を活用し、体験活動を実施する。

<計画>

① 夏の自然体験・キャンプ

Reframe の利用者及び地域の子どもたちに、自然の中での不自由な生活体験を通して都会での暮らしの便利さを実感してもらいつつ、人との助け合いの中で喜びを分かち合うこと、自然の大切さを体験してもらう。また、小中学生での異年齢交流を通してリーダーシップを学び、対話を通して価値観の共有を行う。

7月31日～8月1日 りり溪少年自然の家

<1日目>

- ・川遊びで生き物を探そう！
- ・テントをたてよう！
- ・火おこし体験をしよう！
- ・カレーを作ろう！
- ・キャンプファイヤーで交流しよう！

<2日目>

- ・朝散歩で虫探しをしよう！
- ・塗り箸を作ろう！

② 秋の味覚収穫体験（いもほり、柿狩り）

偏食の子どもたちが多いので、収穫を通して食育をし、食の楽しみを味わってもらう。農作物への興味関心を持ってもらい、収穫後、調理し、共に食べる。

10月31日 るみちゃん農園

- ・さつまいもを収穫しよう！
- ・芋の育ち方を学ぼう！
- ・調理して、みんなで食べよう！

11月28日 千弥農園

- ・柿を収穫しよう！
- ・みんなで食べて交流しよう！

2 計画を通じて感じたこと

当団体を利用している子どもたちは、不登校、発達障害、軽度知的障害などの課題を抱えている場合が多く、一般的な子どもに比べると心が不安定で消極的な子どもが多い。そんな子どもたちは、学校や自治体主催のイベントには特性や自己の課題の関係で参加しにくく、どこか安心して参加できるイベントを探している。そういった事情を抱えている子どもたちが当団体主催の体験学習に参加してくれた。

<夏の自然体験・キャンプ>

当団体初めてのイベントになった自然体験・キャンプでは、45名募集の予定であったが希望者が多かったため定員を増枠し64名の応募がある中、最終的に56名参加された。コロナ禍での開催で様々な不安があり、直前キャンセルになった人も数名いた。また、遠方の方では東京からでもぜひ参加したいと言ってくれていたのだが、感染が広まり医療体制が逼迫していたため直前で諦めた方もいた。

初日は貸切バスで移動した後、川遊びをした。初対面の人たちばかりで人見知りしている子どもが多かったが、水遊びをしたり生き物を探したりしている間に、いつの間にか友だちになっている子が多かった。水が苦手な子はライフジャケットを着ることで安心できたようで、川の中で永遠に浮いていたり、虫や魚探しに集中したりと夢中になって活動していた。昼食までの1時間を川遊びの時間にしたが、あっという間に過ぎてしまい、みんな名残惜しそうにしていた。来年度はもう少し長くいられるようにスケジュールを調整したい。

り溪少年自然の家に着いてから子どもたちは、虫探し、木登りにと夢中になっていた。しかし、「集合」というとスッと集まってくれ、説明は静かに集中して聞くことができた。多動の特性が強い子は一人で歩き回っていることもあったが、その様子を常にフォローしてくれるスタッフがいたため、途中参加であってもスッと輪に溶け込むことができていた。

様々な活動を実施するにあたって、事前にチーム分けが必要なところだけは指定をしておいたが、役割分担まではせずいた。当日、挙手制で役割分担をして実行していったのだが、施設の方は「絶対予定が遅れてしまうと思うのですが、役割分担なくて大丈夫ですか？」と心配されていた。しかし、その心配とは裏腹に、2日間共に予定が遅れるどころか、スムーズに進みすぎて自由時間がたっぷりとできた。このことには、施設の方も非常に驚いていた。

火おこし体験では大人も子どもも必死に火を起こそうと汗だくになっていた。摩擦係と火種係で連動しながら動くことでいかにうまく火を起こせるか、試していた。雨が降った後の悪条件であったため、施設の方は1チーム火おこし成功できればいい方だと言われていたが、5チーム中3チームが火おこしに成功し、これもまた驚いておられた。

夕食の野外炊飯には火おこしの火種を利用して調理した。参加者には偏食の子ども多いと聞いていたのでカレーが食べられない子もいるのではないかと心配していたが、全員「おいしい！」とモリモリ食べていたことも驚きであった。今まで包丁を持ったことがなかった子も、大人に補助してもらいながら挑戦し、火の番も積極的に行う子も多かった。

お風呂の後は、キャンプファイヤーをした。毎月2～3回キャンプファイヤーを企画、実施している方に協力していただくことができたため、非常にユニークで楽しいものができた。子どもたちも初めは「えー！踊ったり

歌ったりするのは、ちょっと…」と消極的な姿勢であったが、大人が楽しそうにしている姿を見て体感したことで次第に変化していき、歌ったり踊ったり叫んだりしながら楽しい時間を共有した。

2日目の朝、子どもたちの遊ぶ声で目覚めた。子どもたちは朝の4時には起床し、走り回って遊んでいた。たった1日で、もうずっと友だちだったかのように仲良くなっていた。朝食前にテントを反転し夜露を乾かし、テントの撤収をすることを学んだ。「テントってこうやって乾かすんだ！」と驚きながらも、テントを反転させることも楽しんでいった。寝袋の片付けには手こずる子どもが多かったが、周囲の大人が手分けして補助しながら進めていった。

2日目の朝食も昼食も食堂での食事であった。配膳係も挙手してくれる子が多く、誰かのために何かしたいと思っている子が多いことに感動した。食後の片付けや掃除も、子どもたち自らやり遂げていった。

食事とテント等の寝具の片付けの後は、「塗り箸づくり」を体験した。木に貝殻を埋め込み、上から漆を塗ったものをヤスリで削りながら美しい箸に仕上げる物作りを経験した。手先が不器用な子どもも多かったが、指導員の方にアドバイスをもらいながら取り組んでいた。2時間かけて仕上げるのが一苦労の子もいたが、みんな諦めずにやり遂げてくれた。



<秋の味覚収穫体験（いもほり、柿狩り）>

収穫体験は、それぞれ好みが出た。芋掘りは多くの参加があったが、柿狩りは好き嫌いが多かったようでなかなか参加者が集まらなかった。

芋掘りは、南丹市にある「るみちゃん農園」を訪れた。土を触り、芋を掘り当てることに喜びを感じている子が多かった。根っこが芋になることを初めて知った子も多く、根を辿って土の中に埋まっている芋を探し当てることも宝探しのように楽しんでいった。1時間ほどで人数分の芋を全て掘り終わり、その後は昼食時間を含めて川辺で自由に遊ぶ時間を作った。子どもたちは川の生き物や石の形に着目し、いろんなものを見つけては報告してくれた。市内に住んでいる子たちが、いかに自然を欲しているのかがよくわかった。

掘った芋を持って、全員で集合場所のくらは庵に戻り、焼き芋を作って食べた。掘りたてのお芋は甘さが物足りないところもあったが、塩や砂糖をつけたりしながらそれぞれの好みの味にして食べているところがユニークだった。

柿狩りは市バスを乗り継いで「千弥農園」を訪れた。柿畑をなかなか見ることがないので、一面に広がる農園を見るだけで珍しがっていた。柿を手でもぎ取ることも初めての子が多く、ねじるだけでもぎ取れる感触を楽しんでいた。また、柿とり棒を使用して、脚立でも届かない場所の柿をとることに挑戦していた。保護者と協力しながら収穫することもいい経験になったようだ。

柿を食べる時も、子どもたち自身で皮むきに挑戦した。初めは包丁で皮むきをすることに苦戦していたが、2個3個と剥いていく中でコツを掴んでいった。最後には「剥いてあげるから食べてね！」と大量に剥いていて、食べる方が大変になった。



<総括>

チームワークとは？役割分担とは？を考えさせられる体験活動になった。

「子どもは、あらかじめチームも役割も決めておかななくては実行できない」

そう考えている大人が多い。

しかし、私たちは「子どもの主体性」を重視しているため、あえて「決めない」方向で実施してみた。そして、やってみた結果、何も支障がなかった。それぞれに「したい」意思を尊重でき、譲り合い、確認しあい、それぞれの課題に合わせて実行できた。しかも、スケジュール通りに、時間が押すこともなく。

何かを率先して行動している子どもたちに「やってあげたんだ」という感情はない。挑戦できたこと、挙手して実行できたことに達成感を感じ、共に実行した子どもたちとの共有時間を楽しんでいた。何かに挑戦し、体験した経験は、ポジティブな思い出として記憶されているように感じている。

そして、「自主的に行動」することで「できない」ことは誰かに頼り、「できる」ことで役に立つ経験もできていると感じる。発達障害や軽度知的障害のある子どもたちがいる中で、みんな平等に何かをしてもらうことは難しい。しかし、自主的に行動することで「公平」な分担が自然とできたように思う。

「誰かが困っている」なら手助けし、「自分でできること」は一生懸命し、「できない」ことは助けを求める。これらが自然に行える人に成長することが「生きやすさ」にもつながっていくのではないかと考える。今回の3つの活動の中で、子どもたちはその経験ができたと感じた。

3 今回の経験を今後どのように生かしていくか

当団体は今年設立したばかりである。そのため、この体験活動は実験的なものとなった。

結果的に、体験活動は子どもの主体性の育成にはとても重要であることがわかったため、来年度も続けて実施していきたいと考えている。

体験活動は四季折々、多様なものがある。それらを1年を通して実施し、日本の季節を感じながら主体性や食育などの教育を実施していきたいと考えている。

4 今後本プログラムを希望する方へのアドバイス

資金不足のために企画を諦めてしまっている方にはぜひ助成申請に挑戦してもらいたい。

子どもも大人も「やってみたからこそ、見える」ことが多い。

チャレンジする前に諦めるのではなく、チャレンジしたからこそ「できた」体験ができる。

5 主な支援金の使途（別紙添付）